

【第3次計画の考え方】・章立ての構成については基本的に第2次計画を踏襲しつつ、具体的な取組みについてはライフステージ別での記載に加え、ライフコースの取組みも意識し、新たな指標を設置する
 ・第2次計画で課題となった歯周病対策を重点とし、各ライフステージでの取組みを通じて、歯科健診への受診をはじめとする生涯を通じた切れ目のない歯科口腔保健の推進に取組む。

第1章 第3次計画の基本的事項

1 計画策定の経緯

歯と口の健康は、全身の健康を保持する上で基本的かつ重要な役割を担っており、府民が生涯を通じて豊かな生活を送るために、歯と口の健康を保持することがとても重要な役割を担っている。
 そのため、歯科口腔保健の推進に関する目標を達成するための必要な施策の方向を示し、その解決を図るための取組みを総合的かつ計画的に推進する。

2 計画の位置づけ

・歯科口腔保健の推進に関する法律第13条第1項に基づく都道府県計画
 ・大阪府健康増進計画、大阪府食育推進計画、大阪府医療計画、大阪府医療費適正化計画、大阪府高齢者計画など他計画との整合を図る

3 計画の期間

令和6(2024)年度から令和17(2035)年度までの12年間

第2章 第2次計画の評価

評価概要 数値目標として設定している全13項目

区分	評価	項目数
A	目標値に達した	7
B	目標値に達していないものの、ベースライン値と比較して改善傾向にある	2
C	ベースライン値と同程度で、明確な改善傾向も悪化傾向もみられない	0
D	ベースライン値よりも悪化している	2
-	ベースラインの変更等により評価ができない	2

【成果】・むし歯の指標をはじめ、ほぼ目標は達成されている。
 【課題】・歯周病の指標は悪化したため、定期的な歯科健診の受診強化が必要
 ・歯の本数指標が国調査の影響を受ける。府独自調査とするか検討必要

第3章 府民の歯と口の健康をめぐる現状と課題

1 乳幼児期

むし歯は減少傾向も、3歳児は全国と比べて低い状況。

2 少年期

むし歯は減少傾向で、全国と同程度。

3 青壮年期

むし歯は減少傾向も、歯周病治療が必要な府民は増加。若年層ほど定期的な歯科健診を受診する割合は低い。

4 中年期・高齢期

むし歯は減少傾向。
 6024・8020達成者は横ばい、歯周病治療必要者は増加、咀嚼良好者の割合は増加。

5 歯科受診をすることへ配慮が必要な人

定期的な歯科健診を実施する介護保険施設等は約5割、障がい児者入所施設は約7割と改善を認める。

第4章 基本的な考え方

第5章 取組みと目標

【基本理念】全ての府民が健やかで心豊かに生活できる活力ある社会 (※健康づくり関連計画と協調)

【基本方針】(1) 歯科疾患の予防・早期発見、口の機能の維持向上

【基本目標】歯と口の健康づくりによる健康寿命の延伸・健康格差の縮小、歯科口腔保健の推進のための社会環境の整備

(2) ライフコースに沿った歯と口の健康づくりを支える社会環境整備

	具体的取組み	府民の行動目標	主な数値目標
1. 歯科疾患の予防・早期発見、口の機能の維持向上	(1) 乳幼児期 ▼関係機関と連携した、子どもや保護者に対する、歯と口の健康づくり良好者の表彰を通じた普及啓発 等	・乳歯がむし歯にならないよう、家庭や幼稚園などを通じて、歯みがき習慣を身につけます 等	●むし歯のない者の割合 (3歳児)
	(2) 少年期 ▼好ましい歯科保健行動や習慣を児童・生徒が身につけることができるよう、歯科保健指導を担う学校保健専門職(学校歯 科医等)と連携した、児童・生徒への働きかけ 等	・乳歯や永久歯がむし歯にならないよう、家庭や学校などを通じて、歯みがき習慣を身につけます 等	●むし歯のある者の割合 (12歳)
	(3) 青壮年期 ▼成人歯科健診(歯周病検診)受診の必要性や実施状況について、啓発資料を作成。また、地域の商工会議所、協会けんぽなどの医療保険者などと連携した啓発の充実 等	・市町村で実施している成人歯科健診(歯周病検診)などを活用し、定期的な歯科健診を受診します 等	●むし歯のある者の割合 (16歳) ●過去1年に歯科健診を受診した者の割合
	(4) 中年期・高齢期 ▼咀嚼(そしゃく)や嚥下(えんげ)に着目した口の機能の維持・向上のために必要な意識について多職種との連携を通して普及啓発を行い、オーラルフレイル対策に取組む 等	・口の機能(食物を口に取り込み、かんで飲み込むこと、しっかり話せることなど)の向上のために必要な知識を身につけます 等	●咀嚼良好者の割合 ●20本以上の歯を有する者の割合 (80歳以上)
	(5) 歯科受診することへ配慮が必要な人(要介護者、障がい児者) ▼要介護者、障がい児者や家族、介護にあたる施設職員に対し、歯と口の清掃及び定期的な歯科健診等について、施設への出前講座や実地研修の機会などを活用し、情報提供 等	・家庭や施設などにおいて、歯間部清掃用器具(デンタルフロス、歯間ブラシ等)を使ったセルフケア(歯と口の清掃)を行います 等	●要介護高齢者施設での定期的な歯科健診の実施 ●障がい者及び障がい児入所施設での定期的な歯科健診の実施
2. ライフコースに沿った歯と口の健康づくりを支える社会環境整備	(多様な主体との連携・協働) ▼若い世代が歯と口の健康にかかる意識づけや実践を行えるよう、歯と口の健康づくりをテーマに含めてセミナーを実施する大学に対して、就職セミナーなどの場を活用し、啓発資料の提供や講師の派遣 ▼「健康経営」に取り組む事業者に対し、歯と口の健康づくりの視点も含めるよう働きかける ▼公民連携の枠組みを活用し、府民の健康づくりに取り組む民間企業と連携し、府民や事業者に対する情報発信、健康イベントの開催などを通じて、歯と口の健康づくりにかかる普及啓発を推進 等	・若い世代や働く世代などがかりつけ歯科医をもち、歯科疾患の予防、早期発見等に取組めるよう、事業者や医療保険者、関係団体、市町村など多様な主体の連携・協働した取組みを行います 等 ・ライフステージ毎の目標に準拠 等	ライフステージ及び要介護者・障がい児者の目標を準拠しつつ、ライフコースに基づいた指標を取り入れる

【推進体制】 府民の歯と口の健康づくり関係団体等で構成する「大阪府生涯歯科保健推進審議会」を活用し、関係機関が連携・協働して、オール大阪の体制により効果的な歯と口の健康づくり施策を推進

ライフコースアプローチとは

- ・成人における疾病の原因を胎児期、乳幼児期、およびその後の人生をどのような環境で過ごし、どのような軌跡をたどってきたのかという要因で説明しようとする概念
- ・歯科疾患は蓄積性の疾患とこれまで捉えられており、小児期からのう蝕予防をはじめとする対策が、歯の喪失防止および口腔機能の保持にかかわる生涯保健に有効と考えられる
- ・歯科口腔保健はライフステージ毎の特性が明確であり、その課題や目標を設定しやすい分野である一方で、各ステージを断片的に捉える意味合いが強い印象となる。生涯保健として連続して捉えるためには、ライフコースという概念が優れている

大項目	小項目	ライフコース		
		小児期	成人期	高齢期
健康状態	口腔機能	<ul style="list-style-type: none"> ・口腔機能の発達（咬合力、咀嚼機能等） ・口腔機能の発達不全、獲得不全 ・食べ方の機能発達 	<ul style="list-style-type: none"> ・口腔機能の維持・増進または改善（咬合力、咀嚼機能等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・口腔機能の障害（摂食・嚥下障害、咀嚼障害） ・口腔機能低下症（咬合力、咀嚼機能等）
	う蝕（むし歯）／ 歯周病（歯肉炎・歯周炎）	う蝕 歯肉炎	う蝕 歯周炎 歯数	う蝕 歯周炎 歯数
口腔保健行動	歯みがき 歯科検診		歯みがき習慣、歯科検診の受診	